

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第14回

花に来る虫たちー甲虫・チョウなど



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(14) 花に来る虫たちー甲虫・チョウなど

花粉を花から花へ運び、受精の助けをする昆虫は、植物の繁殖のために大切な存在です。その中でもっとも役立つ昆虫はハチとアブで、すでに第4、第5および第9回のコラムでこれらの活動振りを紹介しました。これらの虫たちのほかにも、甲虫の一部やチョウの仲間その他いくつかの昆虫が花粉の伝搬に一役買っています。でも、中にはわれわれにとってあまり好ましくない花好きの虫もいます。今回はみずき野周辺に見られるそれらの仲間について書いてみましょう。

(1) ハナムグリの仲間

ハナムグリはコガネムシの仲間。他のコガネムシ同様、幼虫の間は堆肥、腐植あるいは朽ちた倒木などを食べています。しかし一般にコガネムシの仲間は花に止まることは少なく、植物の葉に止まってそれらを食べます。これらのコガネムシと違って、ハナムグリはもっぱら季節の花にもぐり込んで、花粉や蜜を食べます。ハチやアブに次いで、花粉の運び手として最も強力なのはハナムグリの仲間でしょう。

なかでもコアオハナムグリはみずき野周辺にもっとも多く、草の花や木の花によく止まっています。コアオハナムグリは通常緑色ですが、赤銅色のものもいます。外側の翅には毛がまばらに生えています。



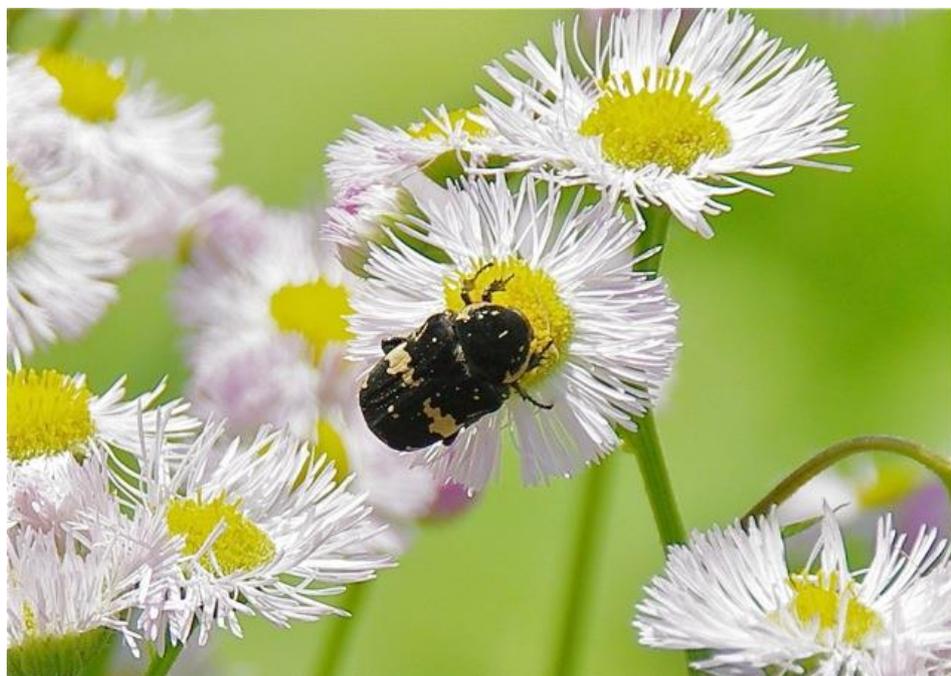
シャスタデージーの上の
コアオハナムグリ
5月上旬 3丁目

コアオハナムグリより大きくて体に毛が目立つハナムグリ（ナミハナムグリ）も普通に見られるハナムグリの仲間とされていますが、みずき野周辺では見たことがありません。コアオハナムグリより大きく、毛がなく、濃い緑のアオハナムグリは稀にみられます。



イボタノキの花の上の
アオハナムグリ
5月下旬 本町地区

クロハナムグリはコアオハナムグリほど多くありませんが、ときどき花の上で見つかります。明るい茶色の斑点をもつ真っ黒い小さなハナムグリです。



ハルジオンの花の上の
クロハナムグリ
5月下旬
本町地区

シロテンハナムグリはハナムグリの中では大型で、ブーンという翅音高く、季節の花に飛んできます。以前はたくさんいたように記憶しているのですが、近頃はあまりみなくなりました。カナブンと同じように樹液にもやってきます。

ガガイモの花に来た
シロテンハナムグリ
8月中旬
8丁目東隣接地



(2) モモブトカミキリモドキとジョウカイボン

両種とも外見はカミキリムシに似ていますが、カミキリムシの仲間ではありません。

モモブトカミキリモドキはカミキリモドキの仲間の一つですが、数はもっとも多く、春から初夏の草花の上に群がっています。体長は6～7ミリ。濃藍色で、雄は後脚の付根が目立って太く（「モモブト」の名の由来）、雌は太くありません。この虫は「カンタリジン」という有毒物質を体外に分泌し、これに触れると皮膚に水ぶくれを生じますから、触らないようご注意ください。



シャスタデージーの上の
モモブトカミキリモドキ
上が雌 下が雄
5月上旬 3丁目東斜面

ジョウカイボンは15ミリ内外で、春から初夏に草花の上によく見かけます。肉食昆虫といわれますが、花の蜜も吸っているようです。カミキリムシに似たかたちをしています。おしろホタルに近い仲間です。モモブトカミキリモドキのような毒素は持っていません。

ハルジオンの花の上の
ジョウカイボン
5月上旬
3丁目東斜面下



(3) アカハナカミキリ

ハナカミキリは花の上に見られるカミキリムシの仲間で、美しいものが多く、山地ではいろいろな種類が見られます。しかし、みずき野周辺ではアカハナカミキリしか見たことがありません。幼虫は広葉樹や針葉樹の枯木や倒木を食べています。



ヤブジラミの花に来た
アカハナカミキリ
7月上旬 本町地区

(4) 室内の大害虫 ヒメマルカツオブシムシ

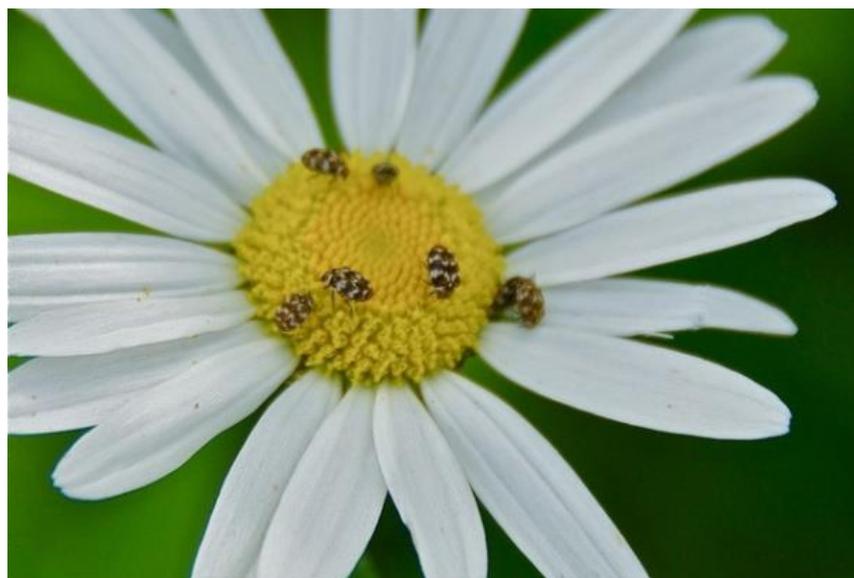
この虫は1年に1度卵から幼虫になり、長期間脱皮を繰り返して生長します。生長すると3～4ミリになり、茶色く、毛虫のように毛が生えています。幼虫は家の中に棲み、タンスや洋服ダンスに入り込むと、服地の羊毛・毛皮・絹を食べて、大切な衣服に穴をあけてしまいます。動物性乾燥食品も食べますから、それらは密封しておく必要があります。さもないと、食事の際、一緒に食べてしまうかもしれませ

ん。博物館などでは動物や昆虫の標本を食い荒らす大害虫です。蛹から成虫になると、すぐにその場で交尾・産卵し、子孫を増やしてゆきます。

交尾し産卵したのち、成虫は戸外に出て、主としてマーガレットやそれに近いキク科植物の花に集まる習性があります。庭のマーガレットなどの上にこの虫がいたら、家の中ですでに悪さをしてきた可能性があります。花の上でもペアリングしているようにも見えますが、もう一度室内に戻って産卵するのかどうかは分かりません。

シャスタデージーの上の
ヒメマルカツオブシムシ

5月下旬
第2調整池



(5) ヤブキリの幼虫

ヤブキリはキリギリスの仲間で、夏に成虫になって、木に登ります。肉食の昆虫ですが、幼虫はよく草花に止まって、花粉や花弁を食べています。



シャスタデージーの上の
ヤブキリの幼虫

5月下旬
3丁目東斜面

(6) アカスジカメムシ

花に来るカメムシは少ないのですが。アカスジカメムシはセリ科の植物の花に止まって蜜をすいます。赤い地に黒い縦縞のなかなかしゃれた模様の美しいカメムシです。

ウイキョウの上の
アカスジカメムシ
7月下旬
貝塚地区



(7) 花に来るガ

ガの多くは口吻（こうふん）をもち、樹液や果物の汁を吸うものもありますが、花から蜜を吸うものも少なくありません。

寺田寅彦の随筆「烏瓜の花と蛾」には、庭に繁茂するカラスウリが夕暮れに一斉に花を開かせ、そこにたくさんのガがやってくる様子が描写されています。

「烏瓜の花が大方開き切ってしまう頃になると、どこからともなく、ほとんど一斉に沢山の蛾が飛んできてこの花をせせって歩く。無線電話で召集されたかと思うように一時にあちらからもこちらからも飛んでくるのである。これもおそらく蛾が一種の光度計を所有しているためであるが、それにしても何町何番地のどの家のどの部分に烏瓜の花が咲いているということ、前からちゃんと承知しており、またそこまでの通路をあらかじめすっかり研究しておいたかのように真一文字に飛んでくるのである。」



多分、昼の花にチョウがやってくるように、夜咲く花（ヨルガオ、マツヨイグサなど）にはそれらの受粉にいろいろなガが一役買っているのではないかと推測します。ただし、私は夕暮れ以後、散歩する趣味がないので、ガたちの活動振りをほとんど見たことがありません。

しかし、チョウと同じように、昼に花を訪問するガも少しはいます。スズメガの仲間のハウジャクやオオスカシバは、花に近づいてホバリングしながら、口吻を伸ばし、花の蜜を吸います、カノコガ、タケノホソクロバ、シロオビノメイガは昼、花にやってきます。おそらく蜜を吸っているものと思われます。



シソの花の蜜を吸う
ハウジャクの一種
9月中旬 本町地区



ヒメジョオンの花に来た
キハダカノコガ
7月上旬 本町地区



シュンギクの花に来た
タケノホソクロバ
5月中旬 わが家の庭
幼虫はタケやササをたべます。幼虫
に触れるとかぶれるので要注意

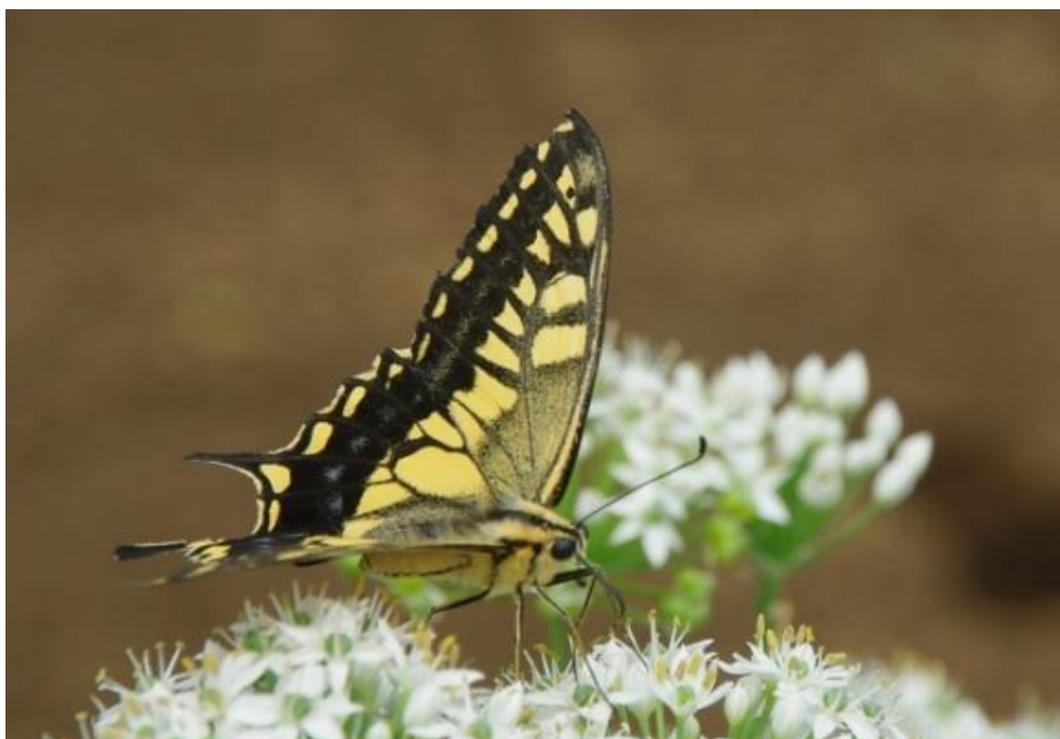


キクの花に止まっている
シロオビノメイガ
11月上旬 小山地区
夏から晩秋まで大量に発生する

(8) チョウの仲間

チョウは、アゲハチョウ、タテハチョウ、シロチョウ、シジミチョウ、セセリチョウなどに分けられ、昼に活動し、蜜を吸うために花を訪問します。いずれもすがた・色・模様が美しく、昆虫の中でももっとも目を引き、好まれている昆虫で、「蝶よ花よ」などという表現があるほどです。

チョウが花にくる様子はかなり写真に収めていますが、ここではみずき野周辺にごく普通に見られる3種のチョウの写真を載せておきましょう。



ニラの花に来た
キアゲハ
9月中旬
貝塚地区

コスモスに来た
ツマグロヒョウモンの雌
9月下旬 第2調整池
雄は翅の先端が黒くない

以前はいなかったチョウですが、温暖化のせいか、暖地から北上し、みずき野周辺でもごく普通に見られるようになりました。幼虫はスミレの種類を食害します。庭に飛んできたら注意して下さい。





ウノハナに止まるモンシロチョウ
6月上旬 第2調整池北隣接地

チョウは多くの文学や芸術に登場します。それらについては別の機会にお話できればと思います。

一つだけ挙げておきますと、私自身はチョウのうちでは、世界中の温帯にみられる最も普通のチョウ、モンシロチョウが一番好きです。幼虫がキャベツの大害虫なのは困りものですが。

小説「にんじん」などで知られるフランスの小説家
ジュール・ルナールは、著書「博物誌」（科学的な博物誌では
なく、文学的な博物誌）の中で、「蝶」と題して、
「二つ折りの恋文が、花の番地をさがしてる」（岸田国士訳）
と記しています。

この「二つ折りの恋文」はモンシロチョウに違いないと
私は思っています。

